

「民族紛争」を超えて -- アフリカからの知見と課題 (特集 途上国政治研究の地平)

著者	佐藤 章
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	190
ページ	17-20
発行年	2011-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00046127

特集

「民族紛争」を超えて —アフリカからの知見と課題—

佐藤 章

一・民族紛争への「期待」

西アフリカのコートジボワールでは、二〇一〇年一月に実施された大統領選挙の後、深刻な混乱が起こった。混乱の過程で、同地の日本大使公邸が襲撃される事件が発生したこともあってか、日本で普段あまり知られていないこの国の情勢が注目を集め、同国を研究対象としている私のところに珍しくテレビ解説の依頼が舞い込んだ。以下は、放送台本を担当ディレクターと調整していたときのエピソードである。

まず、コートジボワールの事件を整理しておく。現職と挑戦者が争った決選投票で、選挙管理委員会が挑戦者の勝利を発表し、この結果は国際的にも広く受け入れられた。これに対し、現職側は自身の影響力の強い憲法裁判所に選挙結果の審査を委ね、この憲法裁

判所が全投票の一五%にあたる七〇万票近くを無効とする判断を下して、一転して現職側の勝利を発表したのである。この結果、二人の候補がともに勝利宣言をして譲らない状態に陥った。国際的な調停が難航する間に双方が武力行使に乗り出し、最大都市アビジャンでの戦闘へと発展していくことになった。最終的にこの事件は、国

連とフランスの支援を受けた挑戦者側の軍隊が現職大統領を拘束し、挑戦者が正式の大統領として就任することで二〇一一年四月にさしあたり決着した(筆者による解説記事は参考文献⑤を参照)。

私はこの事件を、敗北した現職が制度的手続きを濫用し、結果受け入れを拒んだ事例と解釈しており、一九九〇年代から続くサハラ以南アフリカ諸国(以下、アフリカ)の民主化過程で生じている問

題だと位置づけていた。しかし、そのような説明に対して担当ディレクターは、「どうも腑に落ちない、それでは分かった気がしない」との難色を示し、次いで、国際的な報道で宗教や民族が対立の背景として言及されていることに触れ、そういった「社会的な背景」はないのかどうか尋ねてきた。

このもつともな疑問に対して、私はこう回答した。「ご存じのとおり、コートジボワールはイスラム教とキリスト教が二大宗教ですし、多民族国家であるため、当然ながら民族間の対立関係や差別も存在します。ですが、現代の対立は、基本的には大統領の座をめぐる二人の政治家の闘争であって、二つの宗教の信徒間の対立と呼ぶのは誇張です。対立する二人の候補者の支持基盤は、現職では南部、挑戦者では北部にあるため、

民族の分布状況に照らして、両者の支持基盤に特定の民族が多く見られることはたしかでしょう。しかし、だからといって、今回の対立の本質が民族対立だと断言するのもまた誤った単純化です」。

しかし、ディレクターはこの説明にも納得せず、つぎのように漏らした。「専門家が仰るのならそうなのかもしれませんが、民族や宗教の対立なくして、選挙の結果をめぐってこれほど対立するとは考えられません」。

この発言には唖らされた。ここでディレクターが表明しているのは、アフリカの政治情勢や紛争が、民族や宗教と結びついていて、かつ、本質的部分を占めているに違いない、という堅固な確信である。同時に、彼の発言は民族や宗教との結びつきが「当然」であるかのような「期待」の表明でもあったのである。

二・社会的構築物としての民族

このエピソードは、民族や宗教がアフリカで発生する政治対立や武力紛争を本質的に規定しているという考えの根強さを示す典型例である。この考え方によれば、ア

フリカの武力紛争は民族（あるいは宗教集団）を主体とする民族間紛争だということになる。これに類した発言にもっとも頻繁に遭遇するのは、学生相手の講義、一般向けの講演での質疑応答、報道関係者からの問い合わせにおいてであるが、職業的研究者からも率直に表明されることがあり、たじろぐこともしばしばである。

実のところ、これは私の個人的な当惑にとどまらない。アフリカでは一九八〇年代の末から武力紛争が多発するようになったが、紛争研究に携わった多くのアフリカ研究者が、一般に流布されがちな民族紛争 (ethnic conflict) という言葉が、実態の理解を歪めることに注意を喚起してきた。

注意喚起の取り組みは、民族を社会的構築物として捉える認識の普及と、植民地支配がもたらした歴史的影響の重視という、研究上の大きな流れを背景としている。一九六〇年代末からの研究の進展により、民族は、文化や血統といった要素によって他の民族と明確に区別される固定的な存在としてではなく、国家の諸制度や社会経済的環境などの背景のもとに、相互行為や動員を通して、動的に再編

されるものとして捉えられるようになった（これが民族に関する研究を積み重ねてきた人類学における共通理解になっていることは参考文献③⑨を参照）。

とりわけアフリカに関しては、植民地支配以前には、活発な人口移動を通して、民族の動的再編がなされていたものが、植民地行政下において首長の任命や行政区画の設定などを通して、民族的アイデンティティが「上から」付与され、統計や民族地図などの統治上の手段を通して固定化されたという事情もある（またこれがアフリカ以外の地域にも該当する現象であることは古典でもある参考文献⑫で示されている）。

このような研究潮流を踏まえて確立されてきた、アフリカの政治対立や武力紛争における民族についての基本的なアプローチは、一般向けの平明な表現で記された津田の記述において的確に提示されている。『○○民族と△△民族の対立』（中略）などの議論や報道に出会ったときには、まず、その『民族』といわれているものが、いったいどういう歴史的背景でいまのような形になってきたのか、『対立』の具体的な担い手は誰な

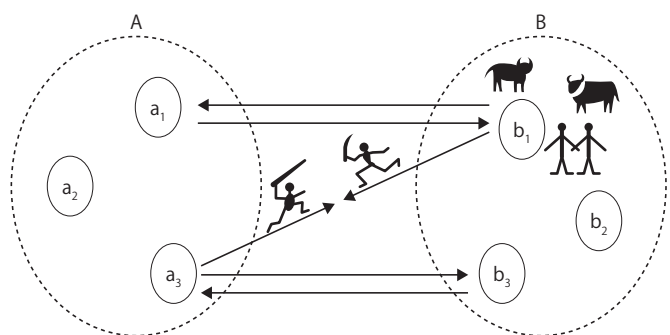
のか、誰が『民族』を自称しているのか、その人たちが『民族』扱っているのはどんな勢力かといった視点から、それらを読み解くことが非常に重要だといえるでしょう（参考文献⑩）。

この基本的アプローチにおいては、民族はもはや現象を説明する所与の要因ではなく、むしろ、民族そのものが説明を要する現象として位置づけられる。武力紛争に「民族紛争」という呼び名を与えただけでは、何の説明にもならない。問題はむしろその先なのである。

三、民族紛争概念の限界と問題

前述の「注意喚起」に戻って、具体例を挙げよう。「○○民族と△△民族の対立」というしばしば描かれがちな構図について、松田は、民族の境界を挟んでの闘争はたいがいの場合、両民族の一部のみが担い手となっていることに注意を促している（図1）。民族の名のもとにされる政治化は、たいいの場合、民族全体に対して部分的なものにとどまるのである。また、政治的に動員された者たちだけに注目するとしても、被動員

図1 「民族紛争」の理解モデル (1) :
〈多くの場合、対立は「民族間」ではなく、「部分間」で展開されている〉

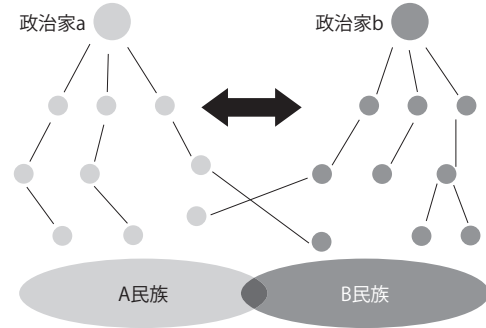


(出所) 参考文献⑩。

者が特定民族によって排他的に構成されるわけとは限らないことを、武内はルワンダの事例を踏まえて指摘している（図2、参考文献⑧）。このことは、民族という観点だけでは、動員の性質を解明できないことを示している。

整理すると、これらの研究は、民族紛争という用語が、しばしば過剰な意味付けとともに（実態は民族の一部しか参加していないのに、全体が参加しているかのよう

図2 「民族紛争」の理解モデル (2):
 (多くの場合、「民族的」な政治動員は、民族横断的になされている)



(出所) 参考文献⑥。

に)、もしくは、語の含意の「外部」(異なる民族の者が何らかの利害に基づいて参加するケース)を考慮せずに使われる点に注意を促している。つまり、民族紛争という用語は、紛争の全体像を概念化するうえで、深刻な限界をもつのである。

長年、南スーダンで紛争の民族誌に取り組んできた栗本も、つぎのように明言している。「あらゆる紛争は、その国の政治、経済社会、文化的な要因と国際的な要因がからまりあった複合的性格を

有しており、民族的要因はそのひとつにすぎない。一見すると民族紛争のようにみえても、あるいは紛争の当事者が民族紛争と規定する場合でも、この用語で紛争全体を形容することには慎重でなければならぬ」(参考文献④)。

このように、武力紛争の実態を理解するうえで、民族の違いを決定的な切断面と見なさないことが、研究上の基本的な見地となる。そして、これは同時に、民族を固定的な存在として具象化することが紛争への負担になりかねない、という倫理的な認識にも支えられたものである。これは、右の栗本が民族紛争と規定する場合でも」という強調にも関係することである。

一九九四年のルワンダ大虐殺は、ツチという民族を名指しして虐殺を呼びかける政権ぐるみの政治扇動の結果として惹き起こされた。この政治扇動はもうひとつの主要民族であるフツに向けてなされたものだが、この扇動に従わない穏健派のフツの人びとも暴力の標的とされた。かくして、暴力の標的となることを恐れたフツの人々—武内の表現によれば「普通

の人々」(参考文献⑦)—も、暴力行為に荷担させられていったのである。

ルワンダの事例は、民族を名指した暴力の扇動が、強力な「行為遂行的」(performative)効果を持ちうることをまざまざと示している。「行為遂行的」とは、事実と異なるにもかかわらず、特定の実践的行為を導き出すような言説のことである。扇動者は、「ツチの脅威」を煽り立てたうえで、軍事組織や民兵を使ってツチへの暴力行使に乗り出した。この恐怖の環境のもとで、民族の別を問わず共存していた隣人同士が殺しあいに誘導されていったのである。

ある社会の成員を民族的に分類すること、民族を集団的な主体と見なし、独自の利害を有する存在として描き出すこと、さらに政治対立や武力紛争を民族間の闘争として描き出すこと—これらの行いが、いかに学術研究の立場からのものだとはいっても、対象社会における当事者の認識と行為に影響を及ぼしかねないというのが、ルワンダ大虐殺の経験によって明らかになったことである。

アフリカ以外の事例となるが、ボスニア内戦における暴力をつぶ

さに整理した佐原は、乱立して錯綜した暴力行為を繰り広げた小規模な民兵組織が、自らの行為を積極的に民族の文脈で位置づけたことに注意を促す。そしてボスニア内戦は、一般に広まっている民族間紛争というイメージとはかけ離れた「カオスの民族化」と呼ぶのがふさわしいと指摘している(参考文献⑥)。この指摘で示されている言説と実態の相互作用は、アフリカの武力紛争から得られた知見にも通ずる、重要な観点である。

四. 民族は何の現れなのか

以上、本稿では、民族紛争という言葉につきまとう問題点を、人類学における民族概念の再構成と、一九九〇年代以降に進められたアフリカの紛争研究から得られた知見に基づいて検討してきた。またこれが、武力紛争の実態理解の面でも、紛争と暴力を助長しかねないという倫理性の面でも、問題を孕んでいることを述べてきた。

このような相対化の作業を踏まえ、改めて噛みしめるべきは、カルドーのつぎの主張である。「世界各地に蔓延している悲劇が止められねばならないと願うならば、何としてもこうした暴力と戦争の

パターンの再概念化がなされなければならぬのである」(参考文献②)。

民族は、紛争という結果を一義的に導く固定的な原因とはもはや見なしえない。民族は歴史的過程を通して動態的に再編される現象であり、武力紛争との関係も部分的なものである。そして、近年の紛争では、言説レベルでの問題として民族を捉える必要がある。つぎに必要なのは、このような相対化された現象として理解される民族が、紛争と暴力に深く関わるかたちで現れ続けているのはなぜなのか、という問いである。

この問いは、民族と紛争に関する研究の最前線に位置している。この問いに直接答える研究は、現在までにそれほど多く出ているわけではないが、今後の考察の手がかりを提供してくれるのが、グローバルゼーションという今日的状況に照らして、紛争と暴力の問題を考えていこうとする試みである。この視点はいまや古典的とも言えるカルドゥの研究(参考文献②)のほか、最近ではアパドウライ(参考文献①)によっても展開されている。グローバルゼーションが生み出した格差や社会的疎外

が世界的に進行するという大状況のもとで、そこに還元されないかなる具体的なプロセスを通して民族と結びついた暴力が噴出してののかを探る問題意識を、両者はともに示している。

この問題意識を翻案すれば、今日のアフリカで生じている暴力が、民族と結びついた体裁を取って現れているとき、それはいかなる意志ないし状況の表現として発現しているのか、という問いになる。国内政治あるいはグローバルな不正に対する異議申し立てなのか、帰属のより所としての国家ないし主権の弛緩に伴う反応なのか、それとも資源獲得のために隣人への危害も厭わないミクロなポリティクスなのか。暴力が生み出される社会過程を丹念に考察することで、民族が何の現れであるのかを探究する作業が今後求められている。

(さとう あきら／アジア経済研究所アフリカ研究グループ)

《参考文献》

①アパドウライ、アルジュン「二〇一〇」『グローバルゼーションと暴力—マイノリティの恐

怖—(藤倉達郎訳)世界思想社。

②カルドゥ、メアリー「二〇〇三」『新戦争論—グローバル時代の組織的暴力—(山本武彦・波部正樹訳)岩波書店、一七ページ。

③川田順造「二〇〇九」『民族』(日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善、一三六—一四一ページ)。

④栗本英世「二〇〇九」『民族紛争』(日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善、五七八—五七九ページ)。

⑤佐藤章「二〇一〇」『バボ氏拘束で新局面を迎えたコートジボワール情勢』(アジア経済研究所ウェブサイト <http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Region/Africa/Radar/201104.html>)。

⑥佐原徹哉「二〇〇八」『ポスニア内戦—グローバルゼーションとカオスの民族化—有志舎三九七ページ。

⑦武内進一「二〇〇三」『ブタレの虐殺—ルワンダのジェノサイドと「普通の人々」—(同編『国家・暴力・政治—アジア・アフリカの紛争をめぐって—』アジア経済研究所、三〇一—三三六

ページ)。

⑧武内進一「二〇〇九」『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド—』明石書店、六四ページ。

⑨竹沢泰子「二〇〇九」『人種とエスニシティ』(日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善、一三二—一三五ページ)。

⑩津田みわ「nd」『民族—身近で、実はあいまいなもの—(アジア経済研究所ウェブサイト <http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Theme/Pol/Ethnic/index.html>)。』

⑪松田素一「一九九九」『抵抗する都市—ナイロビ 移民の世界から—』岩波書店、一〇一ページ。

⑫Anderson, Benedict [2006] *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism (Revised Edition)*, London and New York: Verso.

⑬Mbembe, Achille [2000] *De la postcolonie: Essai sur l'imagination politique dans l'Afrique contemporaine*, Paris: Karthala.